

劔仁美の道徳（第2学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

私は、低学年の道徳において、道徳的価値の理解に基づいて、**よりよい解決方法を見いだす子ども**を目指す。具体的な子どもの姿としては、「〇〇な気持ちはあるけれど、こういうときは△△することが大事なんだ。だから自分だったらこうしようと思う。理由は、△△だから」「(そのように考えたのは)友達の考えを聞いたから」と自覚するところまでを含むものとする。

(○=自分自身の状況や生活経験 △=実感した道徳的価値)

特別の教科である道徳の授業で行うべき学習を、赤堀(2015)は「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深めること」と述べている。道徳的価値の理解を基に、自分自身を見つめ直すことが求められているのである。

これまでの道徳の授業でも、「自分とかかわらせて考えること」が重要とされてきた。しかし、子どもにとって自分とのかかわりで物事を考えるということは容易ではなかった。教師が「こんな気持ちになったことはないか」と問い、経験を想起させても、資料の場面に戻れば知識として知っている道徳的価値を発表するに留まった。故に、道徳的価値のよさを実感するまでには至らないため、実際の生活と学習が結び付かず、表面的な理解に終わってしまっていることが多くあったのである。

道徳の授業で大切にしたいことは、自分の生活経験と関係付けて考える力である。自分の生活経験と関係付けて考えることで道徳的価値のよさを実感される。そのために、以下のように授業を改善していく。

- ① 自分の生活経験と関係付けて考えさせる経験をさせる。
- ② 友達の多様な見方や考え方、感じ方に触れさせる。

①について、低学年だからこそ自分の経験と関係付けて考えさせる経験をさせることが重要となる。資料の場面において、自分にも似たような気持ちや経験があるのか探す経験をさせる。ここでは、「できごと財布」を用いる。「できごと財布」は、その子どもの様々なできごとが入っていると想定している財布である。低学年の子どもにとって、自分の行動を自覚したり、資料の場面に入り込むことは難しい。そこで、自分の生活経験と資料の場面をつなぐ道具として「できごと財布」を位置付けた。

②については、主人公が取った行為について主人公の行為をネームプレートを使い評価させる。子どもは自分の経験に基づき、主人公の行為を評価するため、主人公の一つの行為に対して多様な見方や考え方、感じ方が表される。ここから、「どうすることがよいのだろう」とよりよい解決方法を考え始めるのである。このようにして、目指す姿を具現していく。

2 主張する働き掛け

(1) 「中核的な学習内容」

道徳的価値に基づく、見方や考え方、感じ方が高まること（価値観の高まり）

(2) 「学びをつなぐ力」

関係付けるすべを用いて、自分の生活経験と主人公の行為や気持ちを結び付けて考える力。

(3) 働き掛け

資料は、既存のものを用いることとし、登場人物が迷ったり困ったりする問題場面と取った行為が分かる解決場面に分割して提示する。

子どもは、自分の生活経験から様々な見方や考え方、感じ方をもっており、それぞれの生活経験や生育環境などで異なる。このような子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け1

資料の問題場면을提示し、似たような経験を語らせ、主人公の気持ちに共感させた後に「自分だったらどうするか」と問う。

個々の見方や考え方、感じ方を表出させるための働き掛けである。資料の問題場面を人形劇で提示しながら読み聞かせる。資料の場면을、自分の生活経験に基づいて考えさせるため、資料提示の際には主人公の気持ちに共感させることが重要となる。主人公が置かれている状況を踏まえ、気持ちを考えさせることで、子どもは主人公の気持ちに共感しようとする。そこで、子どもの生活経験を想起させる。経験の想起には、「できごと財布」を用いる。「できごと財布」とは、子どもの経験がつまっているという想定の手帳で、子どもに似たような経験を想起させるための道具である。資料と自分との間に「できごと財布」という経験想起の契機となる道具があることで、子どもは、資料の場面と自分の生活経験との往き来をしやすくなる。と考える。

主人公の気持ちと自分の生活経験を十分に語らせ、「(このようにとき)自分だったらどうするか」と問う。子どもは、自分の生活経験と資料の場面とをかわらせて「これまでの経験」から考える「自分が取る行為」(※C1の子どもの姿が本研究におけるC0の姿とする)をワークシートに記述する。その後、記述したことを交流させる。

資料の場面提示は、人形劇で行う。人形劇は、紙芝居の枠の中で行う。枠の中で場면을提示する

ことで、その場で起こっている状況や、登場人物同士のかかわりを限定して提示することができる。

働き掛け2

資料の解決場面を提示し、主人公の行為を評価させ「主人公がしたことをどう思うか」と問う。

問いをもたせるための働き掛けである。主人公の気持ちに共感している子どもに、資料の解決場面(「対象」)を提示する。すると、子どもは関係付けるすべを用いて、自分の生活経験と主人公の行為や気持ちを結び付けて考え「正直に言えてよかった」「これでいいのかな」などと、主人公の行為について考える。「これでよかったのかな。もう少し早く言えなかったのかな」などというつぶやきを取り上げる。「いいのかな」「これでは、ダメなんじゃないかな」などという、主人公のぼくの行為に対する発言に同意するかどうかを挙手で確認する。挙手した子どもを問いをもった姿とし、学習課題として「ぼくがしたことをどう思うか」を設定する。そして、主人公のぼくの行為を数直線上に評価させ、ネームプレートで表させる。すると、子どもは主人公の1つの行為に対する個々の見方や考え方、感じ方の違いに気付く。その後、行為を評価した理由を問い、発表させる。子どもは、自分の生活経験と主人公の行為や気持ちを比べ主人公の行為を賞賛するだけでなく、「もっとこうすればよかった」と資料の場面に合ったよりよい解決方法を見いだしていく。

働き掛け3

働き掛け1で問うた場面と同様の場面について「自分だったらどうするか」と問い、理由を記述させる。

よりよい解決方法を判断させるための働き掛けである。働き掛け1で問うた場面と同様の場面において「自分だったらどうするか」と問う。子どもは、関係付けるすべを用いて、自分の生活経験と主人公の行為や気持ちを結び付けて考え、「自分だったらどうするか」とよりよい解決方法を判断する。

ワークシートは、働き掛け1と働き掛け3における「自分だったらどうするか」の記述が並ぶような形にする。そうすることで、子どもは自分の見方や考え方、感じ方の変容に気付きやすくなる。

「学びをつなぐ力」の自覚を促す働き掛け

働き掛け1と働き掛け3を比較させ、考えが変わった理由、または、変わらなかった理由を問う。

「学びをつなぐ力」の自覚を促す働き掛けである。資料の場面を通して、よりよい解決方法を創り出し、「自分だったらどうするか」と資料の場面の状況に合ったよりよい解決方法を判断した子どもに、働き掛け1と働き掛け3の記述を比較させる。記述が変化している子どもには、変化の理由を問う。また、変化していない子どもには変化していない理由を問う。子どもは、何がきっかけで自分の考えが変化したのかを考えたり、なぜ変化しなかったのかを考えたりする。そして、「〇〇さんの考えを聞いたから変わった」「みんなの考えを聞いて「なるほど」と思った。やっぱり△△が大事だと思ったから変わらなかった」などと、道徳的価値に基づいて、よりよい解決方法を見いだす子どもとなる。

3 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、「中核的な学習内容」を創り出すことができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を発揮することができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を自覚することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け3を受けて、働き掛け2で見いだしたよりよい解決方法の中から「自分だったらどうするか」生活場面にかかわらせて判断している子どもを、ワークシートの記述から検証する。
- ② 働き掛け2と働き掛け3を受けて、関係付けるすべを用いて、自分の生活経験を基に、主人公の行為や気持ちを結び付けて考えているかどうかを、発言とワークシートの記述から検証する。
- ③ 「学びをつなぐ力」を自覚しているか、働き掛け1と働き掛け3で考えが変わった理由、または変わらなかった理由をワークシートの記述から検証する。

4 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業 (7月) 「なぜ正直に行動することが大切なのか」(2時間)
- (2) 中間検討会 (9月) 「どうすることが友情か」(1時間)
- (3) 初等教育研究会 (2月) 「どうすることが思いやりか」(2時間)